

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



うちぱら ツインズ

小説 斐芝嘉和

挿絵 神保玉蘭

第一章

義妹^{いもうと}×2

006

第二章

はじめての……

024

第三章

義兄^{あに}の務め

061

第四章

風呂と裸と義妹^{いもうと}と

090

第五章

禁忌の唇

143

第六章

揺れる気持ちを抱き留めて

188

登場人物紹介

Characters



多摩 美衣

大介の義妹。双子の一人。開けっぴろげで明るい性格の持ち主。

多摩 琉衣

大介の義妹。双子の一人。マジメで几帳面。不器用な人柄。

多摩 大介

冴えない大学生。大柄で武骨、なのに小心者。手先が器用。

朦朧とした答に、今度は琉衣の顔が強張る。

「やだ、義兄様……どうしたのですか？ しつかりしてください！」

「うん？ ああいや、大丈夫だよ……ねえ、ココも洗う？ 洗うよね。身体の中で、一番汚い場所だもんね……」

催眠術にかかったような口調で言いつつ、大介は、

（うわああつ!? うわ、うわ、なに言ってるんだ俺はああつ!）
我を失うほどに混乱。

触れたい、揉みたい、穿つてみたい——美少女の肉孔に牡の本能が惹きつけられて、どうしても引き剥がせない。

（決めたじゃないか、いい義兄ちゃんになるんだって！ そんなことしたら嫌われる、完全に琉衣ちゃんの信頼を失うッ!! ダメだダメだ、絶対にダメだ……ッ!）

思いを裏切り、手が伸びる。

温かくて柔らかくてモチモチした尻を、左右十本の指がムギユツと掴む。

「ああっ!？」

目の前の鏡にしがみついた琉衣が、雷に打たれたように反り返った。ハの字に開いた脚が小刻みに震え——膝が、カクン!

座り込みそうになる義妹の重みを、美尻に喰い込んだ大介の両手が慌てて受け止める。
「だ、大丈夫？ 琉衣ちゃん……」

心配そうに覗き込むのに、昂奮した手指は柔肉から離れない。それどころか——むにゅ、むにゅ、うにゅ、と武骨な指先を喰い込ませて瑞々しい弾力を計ってしまふ。

(ダメ……止まらない!!) だ、だって、琉衣ちゃんのお尻……こんなに柔らかくて、こんなに温かくて、こんなに揉み心地が……ああ、嫌われる……絶対に嫌われた!)
絹裂くような悲鳴を覚悟し、ギョッと目を瞑った大介だったが——。

「ま、待って、義兄様……ソコを洗ってくださるなら、こ、コレを……」

妙に上擦った吐息をこぼしつつ、四つん這いになった琉衣が細腕を回してなにかを差し出してきた。未練がましく美尻に吸いついている手をどうにか片方だけ外し、受け取ってみると——。

「で……ででで!?」

「デリケートゾーン用の、石鹸……です……ふうう、はああ……ほかの肌よりずっと繊細な場所ですから……どうか、優しく……お願い、します」

犬のような姿勢を恥じたのか、照れ臭そうに笑った琉衣が傍の浴槽に手をかけた。ふらつく身体を引き上げ、膝立ちの姿勢に。

(うわああっ!?)

身体の脇にまっすぐ伸びた細腕の向こうに、ソメイヨシノのような薄ピンク色に輝く乳房がチラリと見えた。もちろんその先の、真っ赤に色づいた乳首も。

慌てて目を背けた大介だが、脇の裏にハッキリと焼きついている。

肩から胸先へと流れるラインは緩やかに立ち上がり、逆に腹から上へと登る稜線はいきなり丸くなっている。大きさは、大介の片手に少し余るくらい。ブラに支えられていないのに美しい曲面が際立った、若々しい張りを湛えた小振りの美乳だ。薔薇の蕾のように紅い乳首はツンと仰向いていた。シルエットはあくまで丸く、たぶん柔らかいのだろうが、しかしなんとなく、未熟な青林檎のように少し硬いような気もする。淡く翳った丸みの下に手を添え、上下に揺らしたら、いったいどんな感触だろう――。

(いやいや待て待て、オッパイはダメだ！)

義妹の胸へと吸い寄せられる視線を、懸命に尻へ戻す。

(洗うんだ、琉衣ちゃんを綺麗にするんだ……お、俺に任せてくれるってことは、まだ嫌われていないってことだろ？ だったら、いやらしいことは考えるな。さっきみたいに揉んじゃダメだ。お尻の穴だけに集中するんだ！)

ボディソープよりも一回り小さなボトルを傾け、左掌にトロリとした液体を溜める。濡れたタイルの床を膝行して、琉衣のうしろへ回り込む。

――膝立ちになった琉衣の尻は、かなり下にあった。洗わなければいけない穴もいまは完全に俯いていて、

「ええっと……」

大介の目に映るのは、濡れ髪が艶っぽく流れ落ちている細い背筋ばかり。

よほど「お尻を上げて」と言いたかったが、なんとかこらえる。

(あ、洗うだけなんだ。見えなくなっただっていいんだ！)

込み上げてくる好奇心を必死に抑えつつ、大介はしきりに両手を摺り合わせた。弱酸性の石鹸がたちまち泡立ち、雲のような欠片がふわふわと舞う。

「じゃあ……洗う、ね」

掌を仰向けた泡だらけの右手を、床を向いた美尻の下へ挿し込み――。

「ふにヤンッ!？」

尻割れの真ん中に軽く触れた途端、琉衣が両腕を突っ張って鋭く伸び上がった。

* * *

「だ、だいじよう、ぶ？」

背後から心配そうに訊いてくる義兄に、琉衣は「いえ」とも「はい」とも取れる曖昧な呻き声を返した。

(は……は、恥ずか……しいっ!!)

顔が火照る。耳の先まで熱くなる。心臓バクバク、頭クラクラ。先ほどまでの冷静さは、義兄の大きな手に尻をムンズと掴まれた瞬間から吹き飛んでいた。

(で、でも……我慢、我慢よ！だ、だって、男のヒトと女のヒトは……っというか、恋人なら、こ、こういうこと、普通にするのよ！……た、たぶん……)

美衣とは違う人間になろうと努めてきたため、この手の情報は極力避けてきた。もちろんままったく興味がなかったわけではない。教科書的な知識なら、たぶん美衣よりたくさん

覚えている。

が、具体的な行為となると——裸の女性が単体で写っている写真の記憶が数葉、いかがわしいマンガの記憶が数コマ程度。いやらしい物事は意識して避けてきたから、その類の記憶はほとんどない。

なけなしの記憶を掻き集め、教科書的な知識で補完し、類推した結果、

（だってだって、男のヒトと女のヒトって、アソコとアソコで繋がるわけでしょ!? だってらお尻だって触るわ、きつと!）

という結論に達した。

いよいよ——というか、やっと、ようやく。

（義兄様が私のこと、義妹いもうとではなくひとりの女のコとして、意識してくれた!）

美衣は『裸を見せればイッパツ』と言っていたが、ずいぶん紆余曲折があった。それらを取り越え、ようやく大介がその気になってくれたようなのだから、この期におよんで恥ずかしがっているわけにはいくまい。

（義兄様はたぶん初めてじゃない、義兄様が知っている……だ、だから、私は義兄様に、すべて、お任せして……ううっ!? ちよ、ちよっと待って……私いま、ものすごくエッチなこと考えているのでは!）

いまさらのようにハッと気づき、やつぱりダメえ、と叫びたくなった、その瞬間。

——ぬちゆりゆ。

尻房の狭間にソツと押し当てられていた義兄の手が、わずかに動いた。ぬめる泡が尻穴に擦りつけられ、会陰部を越えて秘裂へ迫る。

「あふ……ッ!？」

ゾクゾク、ゾクンッ!

背筋を熱い細波が走り抜け、浴槽の縁に乗り上がった身体がピクピク震えた。

(い、いまの……なに? なんなの!?)

理解できないでいるうちに、少し圧力を加えた大介の指先が逆方向へ——にゆる。

「ううっ!」

泡を纏った指先が繊細な菊膜を掠め、またあのゾクゾクが背筋を駆け登る。

「ご、ごめん……痛い?」

「ふえ? えっ!? い、いえ……痛くは、ない……です……」

答える琉衣の声は甘い。

(痛くない、どころか……き、もち……イイ?)

尻穴に湧き上がったのはくすぐったいような、痺れるような——なんとも形容しがたい、不思議な感覚。

肛悦などという卑猥な言葉は知らない。その代わりに、

(こ、これが……大フロイトの言うところの肛門性愛、かしら……やだ!? 私の身体って、まだ幼児期なの!?)

断片的な知識を拡大適用して、自分の身体に生じた感覚を意味づけようとしてしまう。美衣が評した通り、琉衣は頭でっかちなのだ。

（イヤ、ダメ……義兄様に知られたく、ない……私の身体がまだ赤ちゃんだと知ったら、優しい義兄様はきつとやめてしまう……美衣からもらったせつかくのチャンスなのに……明日になればママもオジサマもいる、美衣もいる……義兄様を独り占めできるのは、いまこのときしかないのよ！）

余計なことまで考えて、過剰に危機感を覚えてしまった。

唇を噛み、溢れ出しそうな声を懸命にこらえる。腋を締め、浴槽の縁に着いた腕をまっすぐ伸ばして、全身を強張らせて震えを止めようとする。ぬちゅ、にちゃ、とゆっくり動いている大介の手からさりげなく尻を浮かせて、自分ではどうすることもできない肛悦を少しでも軽くしようとする。

——が、大介は尻孔を洗う気満々だった。

というか、いまはそれしか考えないようにしているようだ。

琉衣の尻が浮けば、泡だらけの手がすぐに追いついてくる。指先が曲がり、小さな穴に触れて、プリプリした縁を確かめ、集中的にしごいてくる。

「ふ……ン……うう……!?」

身体の中で一番穢らわしい場所を大好きな義兄に弄られているから、おかしくなりそうなほど恥ずかしい。笑われてしまうのではないか、汚らしいと嫌われてしまうのではない



か——そういう恐れもあるにはあるが、

(や、やだ……やっぱりコレ、気持ち、いい……お尻の穴、コチヨコチヨされると……と、溶けちゃい、そう！ 肛門性愛期なんだわ、私の身体……まだ赤ちゃんなんだ……うう、せつかくここまで来たのにっ！ お願ひ、気づかないで、義兄様ッ!!)

間違つた思い込みによる羞恥、この行為を中断されるのではないかという恐れのほうが、ずつとずつと、遙かに大きい。

だから——小刻みに動く指先に肛門をさせられた琉衣は、逃げたがる尻を懸命に止め、感じていることを悟られまいと必死に息を詰めていた。

それでも、濡れた床に着いていた膝が少しずつ浮き上がり、下を向いていた美尻も徐々に高くなってきた。菊膜を軽く搔かれるたびに背を駆け抜ける快感が、琉衣の意思を無視し、ほっそりとした裸体を操っているのだ。

ほどよく括れたウエストが、大介の指の動きに合わせてクネツ、クネツ——濡れ髪の貼りついた白い背筋が斜めになり、桃の実のような尻房が大介の腰の高さに。さらにへソを越え、鳩尾みぞおちを越えて——やがて胸の高さに。

ゴクリ、と大介が生唾を呑み込んだ。石鹸にぬめる手を一旦離し、鼻先に浮き上がってきた尻谷をジィッと見つめて、白い泡を纏った尻穴や会陰部、柔らかな内腿の陰で秘かに紅く熟れきつた女のコの場所を、血走つた目で観察。

「うう……!!? お、義兄、さま……?」

熱い視線を感じて羞じらった琉衣が、首を捻って肩越しに怖ず怖ず声をかけると、

「ふあ？ あ、ごめん！」

すぐに返事が返ってきた。

しかし、再び尻穴に触れてきた指先は、先ほどと少し様子が違う。

左右から伸びてきた親指の先が、紅く染まった肛門を左右に押し開こうとしているかのよう——うに、うにゆ、ぬぬ。

(あ……!? いや……ああ、恥ずかしいのに、き、気持ち……イイッ！)

汚辱の穴を揉み解されるという、初体験の羞恥。なのにイヤではない。むしろ続けて欲しいとさえ思う。

(恥ずかしいのは、私はまだ子供だから？ それとも、子供だから、気持ちイイ……のかしら……うう、分からない……身体が熱い。胸がドキドキする、頭がボウツとしてきた)

湯船の縁に乗り上がる姿勢だった琉衣は、いつの間にか背後の大介に向けて小振りな尻をグイッと突き出す姿勢になっていた。両手はまだ、浴槽の縁を掴んだまま。前のめりになった胸を、プルプル震える腕が懸命に支えている。両脚は再びハの字に開き、桜色に輝く柔らかな内腿を大介に見せびらかして、膝がカクカク笑っている。

(こ、これで、いいの？ 大人の男女は、こういうことするの……？ 教えて、美衣……怖いよ、美衣……助けて、美衣ッ!!)

抜け駆けしてでも出し抜こうとしていたはずの姉に、琉衣は必死に呼びかける。双子で

顔を傾けた琉衣が淫茎のつけ根に野苺のような唇を押しつけ、小刻みに、音が立つほど強く吸った。

「くうう——ッ！」

キスを受けた場所から筒先に向け、煮え滾った津波が走り抜けた。

咄嗟に唇を噛み、噴き出しそうになった精液をなんとか押し止める——が。

「美衣たちは、義兄ちゃんの義妹だよ。れちよ、むちゅ！ 義兄ちゃんのこと、大好きだから、義兄ちゃんに悦んでもらいたい……あもっ！」

「ふあ……あ、うううっ！」

掠れた声で呟く美衣に、再び龟头が啜え込まれた。

——ぬちゅり！

カリ首に絡みついてくる、柔らかな唇。龟头の側面にねちちよりと貼りついてきたのは、温かくてヌルヌルとした頬の内側の粘膜。ザラメのような味蕾に肉冠の額が撫でられ、鮮烈な電流が渦巻いた。

「ぬう、くううッ!!」

迸りそうになる白濁液を必死に押し止めると、美衣が唇を窄め、頬を凹ませて、じゅちゅ、じゅちゅ、といやらしい音を立てながら一心不乱にしゃぶり始める。

（だ、ダメだ……気持ち……イイッ！）

淫肉にぬちちよりと絡みついてくるぬめりは、美衣の頬内側の粘膜か。コリコリ硬い上

顎に筒先が擦れ、敏感なエラ縁や感じやすいカリ首をくねる舌に舐めまくられて、痺れるような快感が尿道を逆流。

——ドッドドッド！

淫茎の芯に煮え滾っていた精液が怒濤のごとく迫り上がってきた。

「く、そ、おおっ！」

射精してはダメだ、と意思の力でなんとか堰き止めると、

「ンぷは！ 交替しよ、琉衣」

「い、いいの、美衣？」

「だって義兄ちゃんが、仲良くしろって」

「そうだった、わね……では、遠慮なく……」

——パクッ！

「うぎぎ……ッ！」

今度は琉衣の唇に、亀頭を半分だけ咥え込まれる。

茹だつたゼリーに絡みつかれていようような筒先と、美衣の唾液に濡れたまま焦らすように放置されているエラ縁——快感のギャップがもどかしく、大介の胸中に猛々しい気持ち膨れあがる。唾えるならもっとしつかり唾えろ、美衣がしていたように舌を使い、唇を締めて頬を窄めて、じゅちゅじゅちゅ音を立てていやらしくしゃぶれ——。

（い、いや……ちが、う……俺が言わなきゃいけないのは、そんな言葉じゃなくて……）

わずかに残った理性の欠片が必死にブレーキをかけようとするが、

——れちよっ！ れちよれちよれちよっ！！

鋼のように強張った淫茎の背が、小刻みに翻る美衣の舌に舐めまくられた。

「はひっ!? ああ、う、くうううっ！」

肉棒と亀頭、双子の舌に舐めまくられている二点の間に、稲光のような快感が往復する。

もうダメだ、我慢できない——頭の中が真っ白になり、自制心が吹き飛んだ。

「うお、おとおおっ！」

獣のように唸り、目の前にある美衣の尻をガチッと掴む大介。

その腰が跳ね、

「ンあっ!?」

いまや爆発寸前の肉槍が、尖端を咥え込んでいた琉衣の口を荒々しく突く。

「ど、どうしたのですか、義兄様!?」

「これでいいのよ、琉衣！ ようやく義兄ちゃんおにいがその気になってくれたの。私たちふた

りで、義兄ちゃんを気持ちよくしたんだよ!!」

怯えた妹を、経験者の姉がリードする。

「このまま射精してもらおう！ ほら、口を離しちゃダメ。美衣はこつちをチュパレチョ

するから、琉衣はそつちからして！」

「う、うん、分かった！」

虚空を打っていた男根に、再びねちや、にちよ、と熱い口唇が貼りついた。

「ぬううっ!? ああ……おおっ!?」

上下する肉茎にねっとり貼りつく唇。

美衣の舌は猛る男根を宥めようとしているかのようにチロチロぺちよぺちよ、青筋を浮かべた淫茎を小刻みに舐めまくる。

首を伸ばして亀頭に覆い被さった琉衣は、顎が痛くなるほど口を開け、唾液にぬめる舌を広げて、荒々しい突き込みを柔らかな喉奥で受け止めようとする。

ぬぼっちゅぬぼっちゅぬぼっちゅ——股間に顔を寄せた美少女たちの口唇が、大介の肉棒に犯されて淫らかな音をこぼした。

「も、もうダメ……げん、かい……くううっ! と、止まらんっ!」

突き上げても引き下げても、淫棒に美少女たちの唇や舌が触れる。

赤々と輝くほどに張り詰めた肉冠には生温かな吐息が吹きかかり、義妹たちの唾液を擦りつけられたカリ首や裏筋には痺れるような悦びが閃いた。

「くうう、おおお、うううう——ッ!」

手負いの獣のように唸り、ベッドを軋ませて腰を突き上げる大介。

目の前の美衣の尻房に五本の指を喰い込ませ、もう片方の手は股間へ伸ばして琉衣の頭をガッチリ掴み——。

「で、で……出るううう——ッ!」

びゅくっ！　びゅくくっ！　どびゅびゅっ！

我慢に我慢を重ね、必死に止めていた精液が、怒濤のごとく迸った。

ほとんど真上に噴き上がった白濁液は粘る糸を引いて放物線を描き――。

べちゃ！　ねちよっ！　ぽとと！

淫棒に吸いついていた琉衣と美衣の髪に、額に、頬に、熱い滴となって降り注ぐ。

「ううっ!?　こ、これ……義兄様の……」

「そう、精液だよ……美衣と琉衣で、義兄ちゃんを悦ばせたんだよ……」

生臭く青臭い粘液を浴びた双子の美少女は、湯当たりしたように頬を赤らめ、ポオッとした顔になった。浮かぶべき嫌悪は微塵もなく、いまだにビュク、ビュク、と白い溶岩を噴いている男根をぼんやり見下ろし――。

「ねえ、美衣……私、おかしくなっちゃった。汚いはずの精液を、こんなに顔に浴びせられたのに、すぐく、ドキドキ、してる……」

「私もだよ、琉衣……ねえ、琉衣の顔、舐めていい？　義兄ちゃんの味を知りたいの」

「うん、いいよ……その代わり、私が美衣の顔を舐めてあげる……」

妖しく微笑んだ美衣と琉衣は、互いに引き寄せられているように顔を寄せ、鮮やかに紅い舌をいやらしく伸ばして――相手の頬や鼻筋に垂れる精液を、ぴちよ、ぺちゃ、と拭い取るように舐め始めた。



しつこい愛撫に照れたのか、美衣が妹の秘裂から口を離して細い身体を振った。遠慮がちに尻を揺らし、大介の手を振り払う。

「ワガママねえ、美衣。モミモミしてって言ったのは美衣でしょ？」

姉の太腿の間で、琉衣が呆れ顔になった。が、美衣はクスクス笑い、

「分かってないなあ、琉衣は。エッチはただ、身体を重ねるだけじゃつまんないの。言葉で押したり引いたりして、互いの気持ちを確かめ合わなきゃ」

経験者であることを殊更にアピールする。

もちろん、妹と張り合っているだけではない。

細い肩越しに横顔を見せ、潤んだ瞳で大介を見つめて、

「琉衣にしたみたいに、お尻の穴、クポクポしたいの？」

淫らな雰囲気醸し出そうとする。

「うん、いいよ……義兄ちゃんにされるなら、いい。そっちはまだ処女なの。美衣も琉衣みたいに、初体験、したいな……」

はにかんだ微笑み、上擦り掠れた甘え声——しかし、大介は首を振る。美衣が本当に欲しているのは「初体験」などではない。処女ではない自分でもちゃんと愛されるのだ、という実感だ。

(ただするだけじゃダメだ。気持ちを込めて、しっかりと愛してあげないと……)
処女尻穴に惹かれる獣欲を自制して、視線を下げ、

「どうだい、琉衣ちゃん。美衣のアソコ、どんな味？」

美衣の尻の下で仰向いている琉衣に微笑みかけながら訊く。

「ちよっと待って、義兄様……ンちゅ……ぶはあ……なんだか、しょっぱい、です……甘い
のだけれど酸っぱくて、熱くてトロトロしていて……舌が痺れて、しまいそう……」

改めてクンニした琉衣が、酔ったような顔になった。発情した姉の濃密な牝香を嗅いで、頭がクラクラしているのだろう。大介を見上げる瞳が熱っぽく潤み、愛液に濡れた口元が妖しい微笑みを浮かべてふわっと綻ぶ。

「コレ、挿入られそうかな？」

股間でずっしり重くなっていた男根を示し、訊ねると、琉衣の頬に悦びがよぎった。絶頂の瞬間を思い出してまたゾクゾクしたのか、はああ、と大きな溜息をひとつ。

それでも大介の問いに応えたのは、今度は美衣の番だと弁わえてまえているからだろう。

「待ってください、義兄様……」

と、姉の太腿のつけ根に両手を添え、肉畝に添えた親指で割れ目を掻き開きつつ、美衣の腰をクウツと押し上げる。

ぬば。

淫靡に赤らんだ柔肉が左右に開き、鮮紅色の粘膜襞が蜜の滴を垂らしつつユルユルと咲きこぼれた。ベッドに両手をつけて頭を下げた大介は、琉衣の額に顎を寄せるようにして、美衣の秘裂をすぐ間近から覗き込む。

「ごらんください、義兄様……小淫唇の奥で、膣孔が蠢いています。舌を挿し入れるとムチュムチュムしゃぶられます。クリトリスは、ほら、あんなに硬そう……それに、お汁がすぐいんですよ。私のより濃くてヌルヌルした蜜が、いくら舐めてもあとからあとから溢れてきて……たぶん待ちきれないのですわ。我が姉ながらいやらしいヒトです」

琉衣の言う通りだった。

細指に割り開かれた肉畝は茹だったように紅く、その奥の濃桃色は湯から上がったばかりのようにヌラヌラ光っている。いままで琉衣が舐めていたから唾液も混じっているのだろうが、ほとんどは美衣の愛液らしい。その証拠に、顔を寄せた大介の鼻にも甘酸っぱく芳醇な若々しい牝香がねっとり絡みついてきた。

「いやらしくても、綺麗だ……」

お世辞ではなく本心から言い、ゴクツと唾を飲み込む大介。淫らに潤んだ花卉は琉衣のものよりやや大きく、ぽってりと厚いが、それでもやはりあどけなかつた。陰になったクリトリスは莢から顔を覗かせて、硬く痼った肉豆の尖端が濡れた光を放っている。

穴は——処女だった琉衣と、大して変わらない。しかし琉衣の指先が触れるとキュッと窄み、端を引っ張られると柔らかく歪む。

「この穴、こんなに動くんですね……ひよつとして、私のも？」

恥ずかしそうに微笑む琉衣に、大介は苦笑して見せた。

「俺はハッキリ見たワケじゃないけど、たぶんね。オチンチンをしっかり締めつけてきた

から、琉衣ちゃんの穴も伸びたり縮んだりするんだと思うよ」

「もう、義兄様ったら……！」

怒ったフリをして、頬を膨らませる琉衣。

（よかった……どうやらトラウマにはなっていないようだな）

気難しい義妹と仲良くなれたと実感し、ホッと息を吐いていると――。

「琉衣も義兄ちゃんも、嫌イッ！ 美衣のこと、忘れてるでしょ!？」

四つん這いになった栗毛の少女が細い腰をくねらせ、しっとり輝いている柔尻を激しく左右に振った。

「ごめんね、美衣。忘れたワケじゃないわ。ね、ジツとして。でないとな義兄様のオチンチン、挿入してもらえないわよ」

「なによ、偉そうに！ ……というか、一回エッチしただけですいぶん落ち着いたわね。そんなに義兄ちゃんのおチンチン、よかったの？」

「ええ、とつても……でも、私ではほかのヒトとは比べられないから、どれくらいイイのかなんて言えないけれど」

普段の冷静さを取り戻した琉衣が、美衣の尻を押し上げつつ大介に微笑みかけた。

「？」

意味が分からず首を傾げていると、

「そ、そうよね。琉衣は処女だったんだもんね。経験者の私が、義兄ちゃんのおチンチン

を評価してあげる。さあ、挿入して。いきなりズンズンしてもいいよ！」

偉そうに言った美衣が、鳶色の尻穴を仰向けるように自ら腰を浮かせた。

(なるほどねえ……美衣は琉衣のお姉ちゃんでないか気が済まないのか)

やはり双子だ。互いの扱ひ方をよく心得ているらしい。姉の「経験」に遠回しながら尊敬の念を示すことで、嫉妬に流れかけていた美衣の気持ちを見事に引き戻したのだ。

ありがとう琉衣ちゃん、と胸中に礼を述べつつ、大介は改めて美衣の尻房を掴んだ。

再びピクツと、美衣が強張る。やはり、経験済みであることを自慢げに語っていたのは、不安な本心を隠すための強がりらしい。

(大丈夫だよ、美衣。美衣はなにも損なわれていない。薄っぺらなんかじゃない)

微かに震えているしなやかな背に微笑みかけ、切っ先を上げる大介。鋼の硬さを取り戻した亀頭を、ワインレッドに輝いている秘裂へ——クチユツ！

「ン……ふうう……」

途端に美衣が息を乱した。

痛いのではなく、感じたのだ。

(え？ もう？ それだけ待ちきれなくなってるってことか。でも、淫らすぎる女のこだとは思われたくない……だから、いまにも動き出しそうな身体を懸命に抑えている)

琉衣のときと同じように、美衣の心の動きがよく分かった。亀頭の額にぬっちより貼った温かな膣粘膜から、義妹の揺れる気持ち伝わってくる。



(美衣も意外に見栄っ張りなんだ。可愛いなあ)

強がりでは繊細で健気な義妹を、抱き締めてやりたい、守ってあげたい——温かな想いを胸に、大介は慎重に、ゆっくり腰を進めていく。

ぐ、ぬ、ちゅ——尖端だけに感じていた肉の帳てまひが従順に開き、潤んだ粘膜孔の中へ肉クサビが潜り込んでいく。締めつけこそ琉衣より弱い、代わりにとても柔らかく、とても熱くて——。

「おっ!? なんだ、コレ……す、吸い込まれ、るっ!?」

ぬぶちゅっ!

時間をかけて優しく挿入るつもりだったのに、少し圧力をかけた途端、愛液にぬめった淫棒が一気にカリ首まで潜り込んでしまった。大介の掌の下で瑞々しい若尻がピクン!と跳ね、シーツを掴んだ美衣の手が微かに震える。

それだけではない。

たくましい牡肉を啜え込んだ膣孔がむちゅ、むちゅ、と蠢いて、大介の剛直をさらに奥へ引き込もうとする。

(な、なんて、いやらしいんだ。も、揉まれる……しゃぶられ、るううっ! 見た目は琉衣ちゃんのとそんなに変わらなかったのに、どうして、こんな……というか、琉衣ちゃんの穴も、そのうちにこんな風に、なるのか……な?)

味蓄のようにザラついたGスポットを、亀頭と淫棒のあわいに感じる。肉冠に密着した

淫膜は煮えているように熱く、溶けたロウのようにヌメヌメしている。粘膜のすぐ裏側ではしなやかな括約筋がキュウ、キュウ——まるで待ちわびていたかのように、唾え込まれた牡肉がいきなり淫らにしゃぶりまくられた。

「く……うう……ッ！」

息を詰め、蕩けるような快感をこらえていると、

「う、わ、ああ……こ、こんなに、伸びる、のね……」

姉と義兄あにの結合部を真下から観察していた琉衣が、掠れた声で感想を漏らす。

「すごく、エッチ……で、でも、まだずいぶん残ってるわ。コレ、全部入るの？」

「そ、そうだよ、琉衣……知らなかったの？」

驚いている妹に姉らしいところを見せなければ、とでも思ったのか、琉衣の股間に顔を向けた美衣が震える声で解説し始めた。

感じていないのではない。あくまで「平気なフリ」だ。

その証拠に、息が乱れている。細い身体が震えている。大介が見下ろす薄い背中には焦れつつたそうにゆるりとくねり、透き通るように白かった柔肌に淡いピンクが萌え広がる。

琉衣の腰を隠すように流れ落ちていく栗色の髪が、心なしか艶を増した。柔らかな頭皮に甘酸っぱい汗が噴き出し、しっとりしてきたのか。

美衣が気持ちよくなっているのは、大介の肉棒にも伝わってくる。いつまで経っても入り口に留まっている亀頭に焦れて、しゃぶる動きを強めてきたのだ。慣れている、という

ほど巧みではないが、熱烈ではある。初めてではないことは確かだ。

それが美衣の誇りであり、また同時に不安の種だったのだろう。性交で気持ちよくなれる自分はもう大人だ、と胸を張りたいのに、こんなにいやらしいのでは好きなヒトに嫌われてしまうのではないかと、恐れずにはいられない――。

(あ、あれ……？　なんで俺、こんなに美衣のことを……)

それは、身体だけでなく心までもが繋がった証。

ぬちちよりと絡みついた膣粘膜を伝い、大人ぶっていた義妹いもうとのか弱く揺れる繊細な気持ち、大介の中へ流れ込んでくる――と。

「女のコの穴って、自分が思っているより、ずっと深いの……そうだよ、義兄おにいちゃん」
上擦る吐息を押し隠した美衣が、首をわずかに捻って訊いてきた。

頬は早くも蕩けかけているのに、円らな瞳には微かな不安がたゆたっている。

「あ？　う、うん、そうだよ」

「琉衣に見せてあげて。あ、処女じゃないからいきなり激しく突いても……ふあつ!?」

強がる美衣をたしなめるように、大介の腰がクンッ！　と動いた。茹だつた蚯蚓みみずの群が蠢いているような粘膜洞を、たくましく怒張した亀頭がぐちゅ、ぐぶちゅちゅ、ぬぶちゅちゅちゅ――力任せに掻き分けて、一気に奥へ。

「ン、もう……きゅ、急に、挿入ない、で……びつくり、する、じゃない……」

背を貫いた快悦を誤魔化すように、美衣が上擦った声で詰った。笑顔を作ろうとして失

敗し、細い眉が歪む。苦しんでいるのではない。ふわ、ふわ、と蕩けそうになる頬を、懸命に引き締めようとしているのだ。

「ご、ごめん、美衣……で、でも、俺……くうっ！」

プリプリとした脛襞に亀頭やカリ首を撫でまくられ、悦びの呻き声を漏らす大介。何千何万もの小さな唇や舌に、感じやすい淫肉を舐めしゃぶられているようだ。

美衣の穴が太さに慣れるまで動かないでおこう、とほどよく括れたウエストをガッチリ掴み、こらえようとしていると、

「うわ、ああ……ほ、ホントに、入っちゃった……」

ふたりの股間を見上げる琉衣が、驚いた顔になった。

単一電池より一回り太く、木の根のように捻れた淫茎が、根元までズッポリ呑み込まれている。紅く潤んだ淫穴は厳めしい肉棹に寄り添ってぬっちより歪み、色を失うほど伸びきってツヤツヤと輝いている。

「こんなにアソコが伸びちゃって……全然痛くないの、美衣？」

想像しただけで下腹部がウズウズとしたらしく、ポッと頬を赤らめた琉衣が、姉の頭を挟んだ脚をもどかしそうにくねらせる。

「ン、ふ……痛く、ない、よお……」

妹の手前、恰好をつけたのだろうか。美衣は掠れそうになる吐息を懸命に整え、平気そうな声で言った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で
好評
発売中



織田(希莉香)信長、最大の危機!?
戦国武将の名を持つ美少女達が淫らにバトル!!

信玄、出陣!!
【小説：斐野嘉和 / 挿絵：SAIPACO】

参

全国書店で
好評
発売中



吸血姫と狩獵者二人の影が闇を斬る
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画
が特選のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
【小説：夜土郎 / 原作挿絵：渡瀬行人】

既刊LINEUP
全国書店で好評発売中

- 仙皇学塾戦姫ノブナガツ! ①~②
- 悪者姫なアダム ①~②
- 格闘! 帝部少女探偵団 赤い眼帯を巻いて!

- 借金の狼騎士 ①~②
- プリンセスリバーシ! 交響する美姫と魔姫

- 無敵の狼騎士がDMCに目覚めたようです
- ビルグリムメイデン 深紅の溜り聖女

ビルグリムメイデンII

白装の騎士

【小説：狩野景 / 挿絵：ほちん】



2010 3月 下旬
発売予定!!

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

